

## 論文の和文要旨

論文題目	漢語平江方言の音韻及び文法の体系的な研究
氏名	張 盛開(チョウ セイカイ)

本論文は唯一平江城関方言についての体系的な記述である。漢語方言はたくさんあるが、ある方言を体系的に記述している研究は極めて少ない。本論文は平江方言の実態を知ることができ、研究方法として、母語話者がどのように客観的に自分の母語を記述するのかということについても参考の価値があると考えている。

平江県は湖南(湘語)、江西(贛語)、湖北(西南官話)の三省の交差地帯に位置しているため、方言接触は避けられない。平江方言は贛語の下位方言とされている。平江方言の実態を明らかにすることができれば、湘語、贛語の関係さらには漢語諸方言の歴史的全体像の解明にも大きな意味を持つと考える。平江方言に関する先行研究は、音韻のみを対象としたもの、語彙のみを対象としたものにほぼ限られ、文法に関する記述は皆無に近い。本論文は平江方言の音韻及び文法の体系的な記述を目指す。

第1章では本論文執筆の背景、研究対象、研究目的など、第2章は主に研究方法について述べた。研究方法は実地調査とコーパス調査からなり、実地調査はさらにインタビュー調査と会話録音に分けられる。第3章は先行研究について述べた。

第4章では平江における各地の方言(8地点)の音声、語彙及び文法特徴について述べた。8地点の語彙はそれぞれ特徴を持っており、平江全体の語彙とも関わっている。発音での差異は見られるが、基本的に共通するものが多い。筆者はこれらの特徴から平江諸方言

の再分類を試みた。

第 5 章は平江城関方言の音韻論について言語学的に考察し、分析した。平江城関方言の音韻体系を以下のように設定した。

母音 単母音 9 個 /a e i u ə ə y o /、二重母音 4 個 /ai au əu əu /

子音 21 個 /p p<sup>h</sup> m f t t<sup>h</sup> n l ts ts<sup>h</sup> s tɕ tɕ<sup>h</sup> ʃ k k<sup>h</sup> ŋ x k<sup>w</sup> k<sup>wh</sup> ? /

声調 7 つ、それぞれの調値を /33、13、35、21、55、22、4 / に設定した。

音節構造 (C)(V)V(C)

筆者は先行研究のデータに基づき、更に平江城関方言の 80 年前の音韻論、及び平江周辺の方言の音韻論を設定し、本論文設定した平江城関方言の音韻システムと対照させた。

第 6 章では品詞の分類、それぞれの品詞の特徴や機能、品詞転換について述べた。品詞は大きく分けて、名詞類(名詞、指示詞、人称詞)、動詞類(動詞と助動詞)、形容詞類(形容詞と副詞)、数詞・類別詞、前置詞、助詞、接続詞、間投詞、擬声語・擬態語の 9 類に分けられる。

指示詞は“伊、箇、恩”の 3 系列である。現場指示では 3 種とも使用されるが、文脈指示には“箇”が多く使用される。人称詞の特徴としては 1 人称に除外形と包括形、3 人称に 2 つのセットを持っていることがあげられる。包括形は聞き手を自分と同じ立場に入れたい場合に、1 人称単数の代わりに包括形を使用することが可能である。2 つの 3 人称の使い分けについては「会話に参加する」または「話題の中心である」かどうかという条件を提案する。形容詞は単独では述語にならず、名詞化接辞“咯”を後続させる必要がある。形容詞修飾は名詞の前になる。重ね型のほうでは、単音節形容詞に AA の重ね型が多く見られ、変調も見られる。AAA の重ね型は見られない。

前置詞の“把”は処置、道具、使役、受身(特に間接受身)、対象、方位を表す。所在と起点を表す前置詞に共通する点は動作が“非使然”(何の原因もなく、自らそうなった)か“使然”(別の原因でそうなった)かで、使い分ける点である。このことは受身に関しても言える。

第 7 章は平江城関方言の統語論を文レベルと句レベルに分けて述べた。文レベルの統語論では基本的語順、主題化、基本文型などについて述べた。基本文形では存在文、提示文、疑問文、否定文などについて述べた。否定に使用される表現は 3 つあり、一般否定は“不”、過去は“毛”、否定の命令は“莫”を用いる。更に、北京官話と異なるものは、事柄の途中での変化を表すのに、“毛 V 哒”が使用される点である。これは北京官話に直すと、“没 V 了”に当たるが、“没 V 了”は北京官話では使用できない。

句レベルの統語論では名詞構文、動詞構文、形容詞構文について述べた。名詞のほうでは指示詞と特定性、類別詞の関係について述べた。

動詞構文ではテンス、アスペクト、使役、授受、受動、可能などを述べた。テンスに関しては肯定では動詞に変化やその他のものを付加することはしないが、否定の場合は否定辞が異なる。アスペクト表現はアスペクト接辞などを用いる。アスペクト接辞の“哒”は完了、変化、持続を表し、更にムードを表す機能も持っている。アスペクト表現“落+場所”は動詞

の前に来ると、進行を表し、文末に来ると、存続を表す。継続を表す時は更に副詞的な表現が必要である。

第 8 章では接辞付加、重複、複合の面から、平江城関方言の形態論について述べた。接頭辞については、“老、細”が多用され、“老”は特に親族名称に多く見られる。本当に小さい意味を表す場合、“細”は多くの名詞に附加できる。接尾辞については、“嘖、婆、公、佬”などが見られ、“婆、公”は性別を区別する働きを持っている。“嘖”は指小辞として多くの用法を持っている。大きいものにつけるとおもちゃの意味になり、身体部位につけると子供のという意味になる。さらに、類別詞、副詞・形容詞、親族名称にもつけることが可能である。“佬”は人名の一字目に付き、尊敬を表す。接中辞的な要素は主に「A 人」構造の中に入りこむもので、元の形容詞の意味を拡張し、述語として使用される「A

人」構造に対して、補語になる。重複には完全重複が多く、変調も起こる。完全重複が見られるものは親族名称と形容詞である。特に、単音節形容詞の重複は変調も起こるが、重複後のものは程度が強くなる。

第 9 章では呼称のシステムについて述べた。呼称のほうでは特に親族呼称が特徴的である。自分より 3 世代以下と 3 世代以上のそれぞれの親族に対する呼称がきちんとそろっている。一部の呼称においては男性からまたは女性から見るかによって異なる。

最後に平江城関方言の持つ特徴を音韻、形態・語彙、文法の面から、贛語および湘語諸方言と比較対照を行った。その結果、音韻、形態・語彙、文法の全般において、平江城関方言は現在帰属するとされている贛語より、湘語との類似性が高いことを示していることが判明した。さらに、贛語と湘語の方言特徴語彙と平江城関方言の音韻体系とを比較対照した結果、平江城関方言は贛語より、湘語のほうに近い結果となった。ゆえに、全部を総合して考えると、平江城関方言を贛語より湘語の下位方言とするほうが適切であると判断される。

李藍(1994)では平江城関方言を「総合区分では平江は混合型方言地点で、声調は独立系で、声母は湘語地域に属し、韻母は贛語地域に属す」とし、音声の面から平江城関方言を独立した方言としている。筆者は李藍(1994)の「声母は湘語地域に属す」に加えて、語彙及び文法も湘語地域に属していると指摘する。しかし、贛語とも一部共通した特徴を持っていることから、平江城関方言は湘語をベースにした方言であるが、移民による贛語の影響も受けていると結論付ける。